

令和元年6月28日現在

機関番号：33930

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11828

研究課題名（和文）多職種の観察の視点を活かした支援者連携モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of a Cooperation Model for Supporters that Utilizes Multidisciplinary Observational Perspectives

研究代表者

蒔田 寛子（MAKITA, Hiroko）

豊橋創造大学・保健医療学部・教授

研究者番号：10550254

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的は、「多職種の観察の視点を活かした支援者連携モデル」を構築することである。現状把握のための面接調査と、面接調査の質的分析結果を踏まえたデルファイ法によるアンケート調査を実施した。在宅ケアでの観察の視点には、専門職に特徴的な視点と、共通の視点があった。共通する視点は、【第一印象を大切に】【生活をみる】【疾患をふまえて全身をみる】であった。在宅ケアでは、どの職種であっても症状の変化の報告と対処が求められていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在宅ケアにおける専門職は、疾患をふまえた全身観察と直感的観察の能力が必要であった。多職種連携の際の役割では、訪問看護師は多くの役割があり、訪問療法士は他職種と役割認識に差があり、在宅訪問管理栄養士の役割は栄養に限定し、訪問介護職のみの役割はなく認識に差はなかった。職種の特徴をふまえた結果だが、役割認識の差は連携を困難にすると考える。状態変化のある対象に合わせ柔軟に支援するためには、更に互いの役割を理解し連携することが必要である。

研究成果の概要（英文）：This study aims to build A Cooperation Model for Supporters that Utilizes Multidisciplinary Observational Perspectives. We conducted an interview survey to understand the current situation as well as a questionnaire survey using the Delphi technique, which builds on the qualitative analysis results of the interview survey. The observational perspectives for home care consisted of perspectives characteristic of professions as well as perspectives shared by all professions. These shared perspectives were being careful with first impressions, observing lifestyle, and observing the entire body with the disease in mind. Regardless of job type, home care requires that the professionals report any symptom changes and respond accordingly.

研究分野：高齢看護学

キーワード：連携 在宅ケア 観察 役割 デルファイ法 多職種

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

急速な少子高齢化を背景に、社会保障制度は変化し、2025年に向けて、地域の自主性や主体性に基づいた地域包括ケアシステム構築が進められ、医療は病院中心から地域医療が重要視されてきた。今後はさらに医療ニーズの高い在宅療養者の増加が予測されている<sup>1)</sup>。

医療ニーズの高い在宅療養者の増加に対しては、医療と介護の連携、複数の機関との連携が必須である。そのためには疾病の予防、医療、福祉の共通基盤を理解し、その上で各自の専門性を深め、多くの専門職と連携して活動する専門職連携実践(Inter Professional Work : IPW)が重要である。

在宅ケアにおける専門職連携については、多くの研究報告がみられる。専門職連携の利点としては、単独の職種では難しい対象の全体像の把握<sup>2)</sup>、問題解決の促進<sup>3)</sup>、適切な資源の有効活用と専門職自身の発達の促進と良い環境作り<sup>4)</sup>などがある。専門職連携の欠点としては、個人情報漏れと専門職メンバー相互の意見調整に時間がかかるという非効率性<sup>3)</sup>、仕事効率の低下<sup>5)</sup>、専門職間の役割混乱や葛藤<sup>4)</sup>、相互理解が難しく協働関係構築が困難であること<sup>2)</sup>などがある。

在宅療養者への訪問は、原則いずれの職種も一人で行くことが多く、更に在宅療養者の課題は、訪問する職種の専門性に関することばかりではないため、在宅療養者の課題発見には、多職種の観察の視点が必要である。さらに、在宅療養者にとって必要な職種が揃っていない地域ばかりではないため、多職種の観察の視点を活かして支援することは、少ない人的資源での包括的な支援を可能とすることができる。

本研究により、在宅ケアにおける専門職の観察の視点、及び連携の実際と課題を明らかにすることができる。実践的な連携強化のため、多職種の観察の視点を学び活かすことが可能となる「多職種の観察の視点を活かした支援者連携モデル」を構築することは、今後の地域包括ケアシステム構築にとって必要性が極めて高い。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、在宅療養生活を支援している多くの専門職間の相互理解に基づく、在宅療養者の安定した生活継続のために有用な「多職種の観察の視点を活かした支援者連携モデル」を構築することである。本研究の目的を達成するために、以下の検討を行う。

- (1) 専門職の観察の視点と他職種にも必要な視点、連携の実際と課題を明らかにする。
- (2) 在宅療養者を支援している専門職の観察の視点とその差異を中心に、専門職連携を促す方策、および相互理解を促す仕組みという3点を分析検討する。

以上より、多職種の綿密な連携を促し、効果的な支援を実現する新たなモデルを構築する。

### 3. 研究の方法

質的研究および量的研究、2つの研究手法を用いて順次計画的に研究を実施した。

- (1) 専門職の観察の視点と連携の実際と課題の抽出：専門職への面接調査 質的研究  
在宅療養生活支援に必要な専門職の観察の視点とその差異、及び連携の実際と課題の明確化を目的に、訪問看護師、訪問療法士、在宅訪問管理栄養士、訪問介護職を対象とした面接調査から得られたデータを、帰納的に分析する質的記述的研究である。本研究は研究代表者所属機関の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号 H2015001)。

- (2) 多職種連携の際の役割の抽出：デルファイ法による質問紙調査 量的研究  
デルファイ法を用いた質問紙調査実施により、観察の視点を活かした多職種連携の際の役割を抽出した。

#### ① 研究対象者

在宅ケアに従事している訪問看護師、訪問療法士、在宅訪問管理栄養士、訪問介護職とした。訪問看護師を対象に200施設各2名の計400名、訪問療法士を対象に200施設各2名の計400名、訪問介護職を対象に200施設各2名の計400名、在宅訪問管理栄養士を対象に122名に各職種の役割に関するアンケートを送付した。アンケートと共に研究依頼書を同封し、アンケートの送付をもって本研究への同意が得られたものとした。なお、本研究は研究代表者所属機関の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号：H2016007)。

#### 方法

アンケート内容は職種、経験年数、在宅ケアの経験年数、多職種連携の際の役割とした。多職種連携の際の役割に関する設問は、デルファイ法による調査を行った。デルファイ法とは調査したい事柄について、「調査、分析、フィードバック、調査」の順に回収したアンケート結果を対象者に提示したうえで反復してアンケート調査を実施することで、意見の集約を行う方法である。本研究ではまず研究者間で質問紙を作成し、プレテスト後、2段階のデルファイ法による質問紙調査を行った。参加者からコンセンサスが得られたことを示すデルファイ法の同意率は先行研究によって幅があるが、本研究ではより精選された結果を導き出すために同意率を第一段階では60%、第二段階では80%とした。

#### 質問紙の作成

現状把握のためのインタビュー調査の結果をふまえ、多職種連携を行う際に重要な点として抽出された項目、および3名の訪問看護師と協議の基に訪問事業で実施されている項目を追加し研究者間で検討し、質問紙を作成した。

多職種連携の際の役割に関する設問内容は、大項目として、1. 対象の特徴による多職種連携の際の役割(39項目)、2. 在宅医療支援における多職種連携の際の役割(79項目)、3. 日常生活援助における多職種連携の際の役割(32項目)、4. 多職種連携の際の支援の調整(15項目)の合計165項目とした。多職種連携の際の役割に関する設問は、対象自身の職種の役割(自職種の役割認識)だけではなく他職種の役割(他職種の役割認識)も含めて、各職種が各設問の役割を担っているか否かを回答してもらった。

#### データ収集方法と分析方法

調査は計2回実施した。第1回調査では、165項目の質問項目について、自己の職種を含めた4つの職種が役割を担っているかをそれぞれ×で記入するよう依頼した。第2回調査は、第1回調査時に得られた回答から、同意率60%未満の項目を削除し、同意率60%以上の設問項目をそれぞれの職種ごとに×で記入するよう依頼した。第2回の同意率は80%とした。また、職種ごとに自身の職種と他職種間で、役割の認識に差があるかを、小項目ごとに<sup>2</sup>検定にて検討した。なお、統計処理にはIBM SPSS Statistics Ver.19を使用し、有意水準を5%とした。

#### (3)支援者連携モデルの構築

専門職への面接調査のデータの質的分析から、訪問看護師、訪問療法士、在宅訪問管理栄養士、訪問介護職の職種に特徴のある観察の視点と、在宅ケアに共通する観察の視点を明らかにした。そして本分析結果と文献検討をふまえて作成した調査項目によるデルファイ法を用いたアンケート調査を実施した。これらの結果から、「多職種の観察の視点を活かした支援者連携モデル」を構築した。本研究結果について、研究代表者所属機関近隣の医療保健福祉の専門職を対象に報告会を実施し、作成したモデルへの意見を得た。

## 4. 研究成果

### (1)専門職への面接調査 質的研究

4 職種の観察の視点のカテゴリーは、その職種の学問的及び経験的な知識を使って、専門職が意図して行っている観察の視点ではあるが、職種を越えて似た特徴を持つカテゴリーがみられたため、職種を越えて共通する観察の視点としてカテゴリーを形成した。

【第一印象を大切に】: 家に入ったときの雰囲気 家の匂いの変化 いつもと違う感じ など、在宅ケアの経験で培った直感を働かせた観察であり、まず訪問して家に入った際のいつもと違う第一印象から、次の観察に入っていた。

【生活を見る】: 家族の様子 ADLをふまえた生活環境 生活の楽しみ 整理整頓具合 どんな生活を送りたいのか など、家族を含め、療養者のADLに着目した生活の様子を観察していた。在宅訪問管理栄養士は、必要な栄養の確保、食生活に注目し、訪問介護職はいつもと違う環境の変化に注目し観察しているなど、生活の観察ではあるが職種の特徴があった。

【疾患をふまえて全身をみる】: バイタルサイン 疾患から考えられる症状 疾患の自己管理 運動機能 認知機能 など、疾患をふまえて全身状態を観察しているところは共通していた。職種の専門性を基に、疾患を加味して健康状態を評価しており、訪問看護師は、兆候・症状の観察から状態変化への予測的対応を行い、訪問療法士は疾患による関節の可動域制限や補助具を使用した後のADLなどを観察しており、職種による特徴があった。

### (2)デルファイ法による質問紙調査 量的研究

#### ①第1回調査

アンケートの回収は合計185名で、内訳は訪問看護師49/400名(回収率:12.3%)、訪問療法士74/400名(18.5%)、在宅訪問管理栄養士42/122名(34.4%)、訪問介護職20/400名(5.0%)であった。

#### 第2回調査

アンケートの回収は合計107名で、内訳は訪問看護師21/49名(回収率:42.9%)、訪問療法士49/74名(66.2%)、在宅訪問管理栄養士29/42名(69.0%)、訪問介護職8/20名(40.0%)であった。訪問看護師は50代の割合が高く、臨床経験年数や在宅経験年数が他職種と比べて長かった。訪問療法士は女性の割合が低く、20代や30代の年齢層の割合が高かった。

#### 訪問看護師の役割

訪問看護師の役割として165項目中、141項目が抽出され、訪問看護師のみに抽出された項目は92項目であった。抽出された項目における自職の役割認識率は86~100%、他職種から訪問看護師への役割認識率は76~87%であった。

141項目の内、訪問看護師と他職種で役割の認識に差があったのは要介護高齢者や認知症、終末期患者の症状の変化に対する対処方法を他職種に説明する項目と認知症患者に対する項目全般、清潔の援助として対象に合わせた更衣や入浴援助、おむつ交換の方法を他職種に説明する項目などであった。

#### 訪問療法士の役割

訪問療法士の役割として165項目中54項目が抽出され、訪問療法士のみに抽出された項目は12項目であった。抽出された項目における自職の役割認識率は92~100%、他職種から訪問療法士への役割認識率は64~83%であった。54項目全てが、訪問療法士と他職種で役割の認識に差があり、訪問療法士は他職種と比べて自身の役割だと認識している者の割合が有意に高かった。他職種からの役割認識については、神経系難病患者の症状の変化を他職種に報告する項目、姿勢保持、移動動作に関する項目以外は80%未満の認識率であった。

### 在宅訪問管理栄養士の役割

在宅訪問管理栄養士の役割として165項目中8項目が抽出され、在宅訪問管理栄養士のみに抽出された項目は4項目だった。抽出された項目における自職の役割認識率は93～97%、他職種から在宅訪問管理栄養士への役割認識率は74～86%であった。8項目の内、在宅訪問管理栄養士と他職種で役割の認識に差があったのは、褥瘡リスクのある人の栄養摂取について他職種に説明する項目、対象者の水分摂取の状況を他職種に報告する項目、対象者の趣味・嗜好や家族関係について気づいたことを他職種に報告する項目などであった。

### 訪問介護職の役割

訪問介護職の役割として165項目中24項目が抽出され、訪問介護職のみに抽出された項目は0項目であった。抽出された項目における自職の役割認識率は75～100%、他職種から訪問介護職への役割認識率は79～86%であった。他職種と役割の認識に差があった項目はなかった。

### (3) 支援者連携モデルの構築 図1

少ない人的資源で在宅ケアを安定的に提供するためには、職種の専門性、観察の視点をいかして、自分の職種と他職種が実施している役割を互いに理解し連携することが必要である。対象者はいつも同じ状態ではないため、臨機応変に状態に応じてケアを変えていくことができるのも、それぞれの役割を理解し十分な連携ができていからこそ考えた。

そして、療養者の少しの変化に気づくことができるのが、在宅ケアを担う専門職であり、これは、身近な支援者であるからという理由とともに、気づくことのできる能力があるからである。この能力は、学問を背景とした知識と技術、専門職としての経験を通して得た経験知と技術、そして、在宅ケアの経験を通して得た経験知と技術に基づいていた。

在宅ケアを担う専門職は、療養者を生活者としてとらえ、安定した生活を継続することを目標に援助するという在宅ケアの経験を通して、【第一印象を大切に】【生活をみる】【疾患をふまえて全身をみる】観察を身につけ、連携していた。

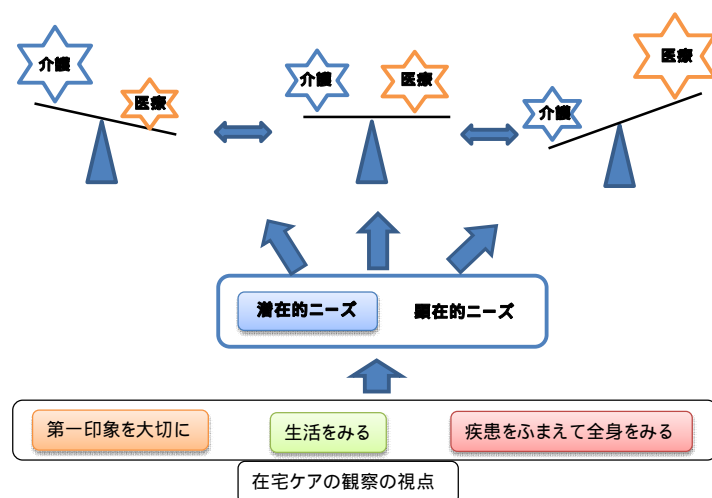


図1 多職種の観察の視点を活かした支援者連携モデル

### (4) 考察

#### ① 在宅ケアに共通する観察の視点

調査により在宅ケアに共通する観察の視点として、【第一印象を大切に】【生活をみる】【疾患をふまえて全身をみる】の3つが見出された。それぞれの専門職がその専門領域における問題を見出し援助するにあたり、まず対象者の疾患を念頭に置きつつ観察し、疾患を加味しながら健康状態を評価していることがわかった。これは、在宅ケアの専門職が共通して、疾患を持ち生活している状況でも、より良い生活を過ごすことができるよう援助しようとする、ケアの視点を持っていることと言い換えることができる。在宅ケアの対象者は、疾患とそれによる症状、障害を持っており、少しの生活の変化が状態の悪化となりやすく、状態の悪化は、入院治療の必要、ADLの低下にもつながり、療養生活の困難さが増強する。そのため、療養者の今後を予測し、異常の早期発見ができることが重要である。在宅ケアでの支援目標は、療養生活が継続できることと考えるが、疾患をふまえた全身の観察を、それぞれの職種の専門性を基に丁寧に行っており、共通する観察の視点として重要である。

地域包括ケアシステムを推進している背景には、深刻化している日本の医療事情があり、医療は高度化し社会的な高負担を生み出す医療構造である上に、人口の高齢化に伴う医療・福祉財政上の問題が逼迫している<sup>6)</sup>。そして入院期間は短縮し、医療依存度の高い療養者が増加している。そのような中、疾患をふまえた全身の観察は、対象を把握する上で必須の観察の視点と考えられる。

また、在宅ケアでは、病院や施設での支援とは違い、生活の中での限られた時間での支援であり、残りの多くの時間は、療養者および家族のみで過ごしている。限られた時間であるから

こそ、少しの変化も見逃さないようにと、療養生活の変化を感じさせる第一印象に注目していると思われた。療養者の背景には家族がいることが多く、生活歴などにより、価値観は様々で個性は大変大きい。第一印象に注目した観察は、専門職としての知識を元に、多様で複雑な対象者への支援で培った経験知による直感的観察であると考えた。

#### 各職種の役割

デルファイ法による質問紙調査において、訪問看護師では165項目中141項目と最も多くの項目が抽出され、他職種からの役割認識が70%以下の回答はなかった。医療的ケアを提供できる訪問看護師は医療と多職種をつなぐ役割があり、病院や施設から在宅に戻る流れの中で患者に最も身近な職種として重要視されている<sup>7)</sup>。在宅医療において訪問看護師には多くの疾患の多彩な症状の変化をとらえ、他職種に病状や対処方法を説明することが求められている。そのため、先行研究と同様に、各職種からの訪問看護師への役割認識が高かったのだと考えられる。

訪問療法士は他職種からの役割認識が低かった。しかし、以前から訪問療法士の対象者は高齢者が多く、認知能力の評価や認知状態に合わせた治療介入が行われてきた<sup>8)9)10)</sup>。高齢期に生理学的予備能が低下することで、不健康を引き起こしやすい状態であるフレイルでは、身体的、認知的、社会的な多側面からの評価や包括的な関わりが重要であり<sup>11)</sup>、訪問療法士の役割を周知していくことが必要である。

在宅訪問管理栄養士では褥瘡や栄養摂取に関する項目が抽出され、他職種からの役割認識が70%以下の回答はなく、専門性が限定されていた。だが、在宅訪問する栄養士には栄養ケアの技術だけでなく、患者の栄養状態や問題点を患者家族や他職種に伝えることが求められているとの報告<sup>12)</sup>もある。今後は、在宅訪問管理栄養士に限ったことではなく、在宅ケアに関わる全ての職種には、自己の職域だけでなく、疾患特有の症状の理解や身体アセスメントの能力が求められると考える。

訪問介護職では日常生活全般に関する項目が抽出され、他職種からの役割認識は79%以上であり、役割が明確であった。しかし在宅では担当すべき職種がチームにいない場合も多く、自分の役割を自ら決めるのではなく、足りない職種の役割をいかに補うかが大切と考えられている<sup>13)</sup>。訪問頻度も多い訪問介護職には、制度上決められた役割を担いつつ、対象者の変化に気づき報告することが、求められていると考えられた。

#### 本研究の限界

在宅ケアでは、職場によって働いている職種が限られている現状から、本研究で抽出されなかった役割を実際に行っていることは多くあると思われる。今後は、今回検討しなかった医師やケアマネジャーなどの他職種も含め分析する必要がある。

デルファイ法によるアンケート調査は郵送法で実施したが、アンケートの回収率が低かった。また、郵送施設の職員配置や多職種との連携状況などは調査していないため、多職種との連携状況に対象者間で差があった可能性がある。今後は、多職種との連携状況なども含めた調査が必要である。

#### <引用文献>

- 宮崎俊彦、 社会保険研究所、地域包括ケアの展望、初版、2013、36-83
- 蒔田寛子、 独居高齢者の療養生活継続支援における支援者連携 訪問看護師の役割に焦点をあてて、豊橋創造大学紀要、17、2013、9-22
- 副田あけみ、中央法規出版、在宅介護支援センターのケアマネジメント、1997、23-38
- Andrews, A, Interdisciplinary and Interorganizational Collaboration, In I. Ginsberg, et al, Encyclopedia of Social Work, Silver Spring, NASW Press, 1990, 175-188.
- 松井由美子、真柄彰、遠藤和男、他、 実習施設における Interprofessional Work の現状と課題、保健医療福祉連携、3(1)、2010、2-9
- 中根晴幸、 幻冬舎、次代を担う医療者のための地域医療実践読本、初版、2016、20-30
- 土屋八千代、 地域包括ケアにおける多職種連携を推進する看護の役割 患者(利用者)・家族と共に、医療安全実践教育研究会誌、4、2017、8-10
- 大淵修一、 柴喜崇、 老年症候群の理学療法評価、理学療法ジャーナル、48(5)、2014、385-395
- 梶田博之、 前田潔、 認知症予防のメカニズムおよび認知症予防に向けた取り組みの現状と課題、仁明会精神医学研究、14(1)、2017、63-70
- Lee H, Park B, Yang Y, Comparison of older adults' visual perceptual skills, cognitive function, and fall efficacy according to fall risk in the elderly, J Phys Ther Sci, 28(11), 2016, 3153-3157.
- 牧迫飛雄馬、 老化とフレイル、理学療法の歩み、28(1)、2017、3-10
- 中村育子、 在宅における多職種連携、臨床栄養、123(6)、2013、730-733
- McKenna PH, The Delphi technique, A worth-while research approach for nursing?, J Adv. Nurs, 19(6), 1994, 1221-1225.

## 5 . 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 2 件)

YASUAKI KUSUMOTO, HIROKO MAKITA, KUNIYOSHI NAGAI, TOMOE YAMANE, Recognition of roles of various professional by home-visiting specialists, The Journal of Physical Therapy Science, peer reviewed paper, 30, 2018, 800-803.  
<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/jpts>

蒔田寛子、楠本泰士、永井邦芳、山根友絵、在宅ケアにおける専門職の観察の視点 訪問看護師、訪問リハビリ職、訪問介護職、訪問栄養士の職種の違いから、豊橋創造大学紀要、査読有、第 22 号、2018、19-34  
<https://sozo-air.repo.nii.ac.jp/>

### 〔学会発表〕(計 4 件)

蒔田寛子、楠本泰士、永井邦芳、山根友絵、在宅ケアでの多職種連携における専門職の役割認識、第 24 回日本在宅ケア学会学術集会、2019

蒔田寛子、永井邦芳、山根友絵、多職種連携における訪問看護師の役割 多職種の視点からみた役割の検討、第 8 回日本在宅看護学会学術集会、2018

楠本泰士、蒔田寛子、永井邦芳、山根友絵、在宅訪問専門における各職種の役割の認識の違い、第 23 回日本在宅ケア学会学術集会、2018

蒔田寛子、楠本泰士、永井邦芳、山根友絵、在宅療養支援における観察の視点 訪問看護師、訪問リハビリ職、訪問介護職、訪問栄養士の職種の違いから、第 9 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、2016

### 〔図書〕(計 0 件)

### 〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：楠本 泰士

ローマ字氏名：KUSUMOTO, Yasuaki

所属研究機関名：東京工科大学

部局名：医療保健学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：60710465

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：永井 邦芳

ローマ字氏名：NAGAI, Kuniyoshi

研究協力者氏名：山根 友絵

ローマ字氏名：YAMANE, Tomoe

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。